重修真書太閤記

五編　一

へ13
459
41

安政戊午晩夏新鐫

東都書肆　知新堂發兌

眞書太閤記　重修五編

柳葊栗原氏校訂

安政戊午晩夏新鐫

柳葊栗原氏校訂

重修
眞書

太閤記五編

東都書肆　知新堂發兌

同攻會印

眞書太閤記三篇剞成之後六年而四篇成未踰月而五篇成六七八篇亦校訂既畢自九編至十二篇其稿半就重修全成可屈指而待焉蓋四篇之成遅而五篇之速猶江越之平

逮于六七年之久而山崎出捷不終日也六篇說下諸篇應此出於四國九州之和朝鮮明兵出漬有破竹決防之勢也嗚呼太閤說廿五就仕六十三而薨起卒伍而終關白未滿四

十年余齡廿五始按其事蹟今殆躋古稀自第一篇而止十二篇矣太閤之功德未滿四十年而被七道及海外則此編亦未滿四十年而久傳播七道及海島者可智也書此於卷端

安政五年戊午端午日半
朽老之撰
秋山安房守正光録

重修眞書太閤記五編總目録

巻之一
信長上洛今川氏眞名器進上の事
并長篠加勢の事
奥平九八郎長篠籠城の事
并鳥居強右衛門尉使者の事
巻之二
鳥居強右衛門尉忠死の事
并織田濱松岡崎勢長篠後援の事
佐久間右衛門尉信盛僞て裏切を約する事

并　酒井左衛門尉忠次奇計言上の事

巻之三
秀吉主従勇戦の事
并　鳶巣落城の事
長篠合戦敗北の事
并　奥平九八郎抽賞の事

巻之四
織田殿上洛御家人叙爵の事
并　赤松小寺別所等初謁の事
信長父子越前進発の事
并　柴田羽柴杉津口に向えんエを望む事

巻之五
秀吉河野新城を乗取事
并　一揆等諸城退散の事

巻之六
越前一揆滅亡國中仕置の事
并　柴田勝家北陸藩鎮の事
江州安土山普請の事
并　京都二条の城經営の事

巻之七
加州一揆羽柴秀吉察柴田胸中事
并　佐久間盛政下向の事

柴田勝家二度加州出陣の事
并 羽柴筑前守柴田と争論の事

巻之八
羽柴筑前守秀吉被止出仕事
并 筑前守於居城游樂事
松永彈正少弼久秀謀叛の事
并 織田勢信貴山を責る事

巻之九
信貴山落城松永父子滅亡の事
并 羽柴筑前守播州下向の事
山中鹿助幸盛備前勢を破事
并 上月十郎上月籠城の事

巻之十
羽柴秀吉大敵を破る事
并 宇喜多和泉守敗軍の事
勝久上月籠城の事
并 秀吉凱陣褒賞の事

巻之十一
秀吉中國退治首途の事
并 信長秀吉陣押見物の事
別所小三郎長治信長に謀叛の事
并 後藤基國異見の事

巻之十二
後藤基國愛子孝高に預る事
　并 粕谷兄弟別情の事
別所孫右衛門尉重相陳謝の事
　并 羽柴秀吉三木の城へ寄る事
巻之十三
秀吉野口城攻乃事
　并 加藤孫六嘉明高名の事
惟任光秀丹州働きの事
　并 荒木山城守降参の事
巻之十四
中國勢上月の城を圍む事
　并 羽柴筑前守後詰乃事
秀吉武威毛利勢を劫る事
　并 安土後援の諸將進發の事
巻之十五
竹中重治為秀吉安土へ参上の事
　并 惟任光秀信忠異見の事
熊見川合戰の事
　并 福嶋正則高名の事
巻之十六
信長公播州下向御延引之事

并羽柴筑前守信忠卿諫言の事
山中幸盛忠肝義膽の事
并上月表諸軍退陣の事
巻之十七
勝久幸盛自害上月落城の事
并筑前守惜幸盛死事
神吉城落城の事
并脇坂甚内安治一番乗の事
巻之十八
荒木攝津守村重謀反の事
并秀吉伴天連を説客とする事

高山右近大夫招中川瀬兵衛尉事
并中川清秀誘安部仁右衛門事
巻之十九
播州平山合戰の事
并別所方勇士戰死の事
秀吉丹生山の砦を乗取事
并淡河弾正城を開退事
巻之廿
三木勢羽柴の砦を攻る事
并羽柴秀吉丹州責を論する事
羽柴秀吉西丹波を征する事

并惟任東丹波働きの事

巻之廿一
波多野兄弟擒られし事
　并光秀遺恨の事
丹州赤井家由來の事

巻之廿二
景忠貂皮の奇瑞を感ずる事
　并赤井悪右衛門尉景遠事
脇坂甚内赤井が城ニ入事
　并安治景遠問答の事

巻之廿三
赤井悪右衛門尉景遠討死の事
　并脇坂家貂の皮の事
小西弥九郎播州へ使者の事
　并竹中半兵衛尉死去遺言の事

巻之廿四
浮田直家人質を送て降參の事
　并三木城兵粮運送の事
大村合戦三木方敗軍の事
　并中國勢播州退去の事

巻之廿五
有岡落城荒木妻子誅戮の事

并三木釜山落城の事
別所長治兄弟自害の事
并秀吉築姫路城事

巻之廿六

備前國初濱合戰の事
并筑前守奇兵退敵事
信長舊臣等改易の事

巻之廿七

秀吉訪佐久間因州陣の事
并山名降參家老逆心の事
吉川經家鳥取籠城の事
并羽柴秀吉遠計の事

巻之廿八

羽柴秀吉鳥取の城を圍む事
并鳥取城中困窮の事
經家森下入道中村對馬守自害の事
并鳥取落城因幡國中平均の事

巻之廿九

羽柴吉川馬野山對陣の事
并秀吉深慮歸陣の事
浮田直家其子秀家を秀吉に託する事
并羽柴筑前守淡州退治の事

巻之三十
於次丸秀勝初陣の事
并信長勝頼退治手配の事
勝頼軍評定の事
并真田昌幸忠諫の事

重修真書太閤記五編巻之一

信長上洛今川氏真名器進上の事
并長篠加勢の事

天正二年三月織田殿岐阜を發途あらせられ江州路を經玉ふ頃越前國乃一揆ぞら平均のよしを言上しけれバ共そきとハその侭ニ打捨玉ふて上洛すは
を十八日信長從三位ニ叙し參議ニ補せられ抑參議ハ大政官中の政ニ參議する顯要の職なれバ左右乃大弁か近衛中將の有才の人まれハ藏人頭あるひは七箇國勘公文の受領すらぞ容易ニ拜任希代乃例

なりとぞや然るに信長其の序を以て南都東大寺
勅封の御蔵に籠らせ処の蘭奢待といふ名香を
拝領せんやと思ひ立内々其旨を願立られしに廿三日
勅許ありて廿六日日野大納言輝資飛鳥井中納言雅
教の両卿勅使として南都へ下向あり信長は志貴多
門の城に寄宿なしたまひ廿七日辰刻東大寺の宝庫を
開き佐久間右衛門尉菅谷九右衛門尉蜂谷兵庫頭塙
九郎左衛門尉武井夕庵松井友閑以上六人を奉行とし
て旧例にまかせ一寸八分を切分て拝領なし給ふ
流布本奉行人の中に柴田修理亮丹羽五郎左エ門尉
荒木摂津守市橋九郎左衛門尉を加えて菅谷塙と

のぞくいま東大寺の記に因て其まきを正せる流布
本多門城へ持行しとある是また誤なり蘭奢待
本名は黄熟香重三貫三百五十目あり蘭字の東奢
字の大待字の寺を合せて東大寺と云字にある是
東山将軍義政公の銘をきられし処とぞや此外に
大紅沈と云香重四貫六百目ありしと国花万葉記
大和部にみゆ
是は東山義政公の拝領ありし御例とぞや信長朝恩
の泰さ麾下の諸将に示さんため蘭奢待を三分に
切て二ツをは柴田佐久間木下蜂谷荒木以下の面々に配
分し給ふ此事を伝聞輩あるひは嫉くあるひは恐き

いよく織田家を重ド思へるとなり四月信長摂州へ出馬ありて石山本願寺を責られしかとも門徒等志ろを致し能防戦しけるによりて勝負見えハ
石山本願寺顕如上人光佐三十六歳教如上人光壽廿歳乃時なり石山ハ本願寺八代蓮如上人兼壽八十二歳の時明應五年七月下旬ならめて山州山科より石山亀り池乃邊に移さるゝ処にして今年まて五代七十九年住居ありしなり
信長天王寺に付城を構へ佐久間右衛門尉信盛を入置きひとまつ帰京ありて五月廿八日岐阜へ馬を入給ひけるか石山かくり路にて門徒等が爲に危ふき目見給

ひしと深く憤らせ給ひ兎角ある宗門乃輩を此まゝにおし置てハ天下政道の妨なるへし殊に勢州長島ハ彼輩徒黨の根本なれハまつ此を討滅さるへしとて七月十三日彼表へ出陣ありて此度ハ是非根を断葉を枯さへしとの事にて信長信忠父子の勢をはしめ北畠乃信雄神戸の信孝をも催促ありて總軍十萬余騎三方より責させ給ふ但この長島といふ処は美濃より流れ落る岐蘇川多度の川々を西北東の三面にうけ南ハ伊勢の海原遠く八重の塩路をへだてたれ去ハ隣國の浪人あふれ者その爰を頼みて身を寄し者元より多かりけるか時を得し心地して郷民一揆等を

進退し城郭を構へ塀柵逆茂木を結廻し楯籠り
かハ織田殿両度出馬ありけれとも志を得給ハずして
しかるに今度は一揆等を尽く打滅さずハ帰らせ給ハ
じとまでおぼし召立給へバ諸國在番の侍大将大方
召具し給ひけり然るに小谷の木下藤吉郎ばかり
ハ越前の門徒乱入の恐れあるにより猶また
厳重にあれを押え置べき旨を下知なし給ふよ
て秀吉ハ小谷に在城しながら中河内口の押えとし
て木の本に磯野丹波守阿閉淡路守を置て堅く守
らせ偖長島進発の御供にハ舎弟木下小市郎秀長を
大将となし人数はかりをわかし添て遣ハされけり信

長年来の欝憤をはらさんとしけれハ諸手に下知して
厳しく攻立られしかバ一揆の城郭追〻に責落さ
れて七月より九月迄に一揆の門徒ことごとく攻落
され長島平均に属しけれとも味方にても織田大
隅守信廣同半左衛門尉津田市之助信成同弟仙千代
同五郎市同孫十郎をはじめ赤見左衛門佐坂井七郎右
衛門尉佐治左市佐藤民部梶原平次宮地介三郎福富
万蔵荒川新八郎等数百人討死せり信長多年の怒
をはらし勢州の仕置を下知せられ長島の城をも
元のごとく北伊勢五郡の領地を添られ瀧川左近将監
一益に給ハり同十月十五日御勢を引上岐阜へ帰城まし

陥しけり
一書に七月長島攻のとき一江口ハ信忠朝臣賀島口ハ佐久間柴田稲葉蜂谷桑名口ハ信雄ともに森武蔵守長一十六歳にて初陣せり八月大鳥井城篠橋城を下し九月廿七日長島一揆退去とうのひ伏勢を置てあまたを撃捕ことごとく是を誅戮せしとあり
其年もいつしかくれて天正三年二月廿七日信長父子上洛ありて相國寺を本陣となされたり此頃今川上総介氏真ハ先年武田信玄に國を奪ハれ畿内を漂泊しけるが信長上洛と聞てあつきもおなじく上京し信長に對面しける音物に百端帆といふ名物乃釣花活に今川家累代秘藏の重寶高麗傳千鳥の香爐といふ宗祇遺愛乃名物を進上ありける千鳥の香爐ハ天下無双の名器にして奇特あるを以て信長ことに喜ひ秘藏ありしが後にハ木下拜領し一代秘藏なし給ふ奇瑞たびたびありける中にも肥前國名護屋の陣中またハ渡海の船中に於て不思議に危急を免れ給ひし也それハ後にまちれを詳にせんへし抑氏真ハ無双の蹴鞠者なりければ信長達て所望ありしかバとて三月廿日相國寺の庭に於てまりを行ハれけるが何様天下の妙足とて群參數萬乃目を驚かせり見物の中にハあそま奇世藝者なれどさきまれと弓矢の道に心を用ひ給

そゞかく牢浪ハあるまじきものを不入藝に堪能まし
ましけることよと嘲るひとも多かりき
宗祇法師ハ文亀二年七月晦日駿河國駿東郡桃園
定輪寺にて終焉行年八十二歳今川治部大輔氏
親の代より氏真今年三十八歳父の仇たる信長に
謟し家寳を贈りかつ爲に蹴鞠をその耻ぢざるを
愧とせど群參の衆に嘲らるゝを宜なるかな
是月信長乃嫡子勘九郎信忠從五位下に叙し出羽介
に任ぜらる依て秋田城介と称せ夫より南方石山に發
向ありて河州摂州に於て小ぜり合ありしかども果
敢しきこともなく四月廿七日岐阜へ還りたまひける

五月十日濱松より小栗大六をはや馬にて岐阜へ走来り
武田勝頼大軍を起し三州長篠城を圍を攻ること急に
して城主奥平九八郎定昌必死になりて拒ぎ守るとい
へども武田勢さかんにして猛勇なれば城中以の外に
難義仕れバすみやかに御加勢として御出馬なし奉るよし
を言上ましにより十三日信長岐阜を發足ありて十
五日岡崎に着たまふ時鳥居強右衛門尉長篠城中を脱
し来り兵粮までに盡兵士ことごとく疲れたり早く
御加勢なくバ落城且夕に逼りと注進せしによつて
信長五萬余騎牛久保に押来る
流布本に石川伯耆守數正奥平美作守貞能岐阜に

參上して加勢を請奉る由を記を促貞能このとき龍山の砦にあり武田勢ありしを押え置て長篠を責ると云ハ岐阜へ至ることを得べからずと鳥居ハ此ことをはやく城中へ知せんと諸軍に先達て立出けり

奥平九八郎長篠籠城の事
并鳥居強右衛門尉使者の事

奥平九八郎定昌行年廿一歳今歳二月廿八日長篠の城を拝領しこれに移て住しけるに武田勝頼三萬七千の兵を率して寄来り五月朔日より城を圍こと十一日にいとう渡合の南門を攻ること弥急なりしかは定昌必死に是をふせぎける処に十二日寄手金堀に本丸の下をほらせて攻入んとせりけるを定昌推察し同しく本丸の下を堀けるに相方堀あてゝ互に顔を見合せやうやく鎗を取て突合遂に寄手を突崩し追返しけれは寄手攻あぐみ十三日ふくべ丸を攻十四日まで南門を責て大小戦ふ武田勢の陣々を見渡せは勝頼ハ醫王山に陣を取武田左馬允信由同逍遥軒信綱ハ大導寺山に穴山入道梅雪一条右衛門大夫信龍小山田備中守信茂ハいまた路川の邉に段々に備を立させて又鳶巣山の砦を後詰の押えにおしへ武田兵庫頭信實を籠置君が臥処といふ処にハ和田兵部

丞を置て守らせ中山乃砦に名和無理助飯尾弥四右衛門尉五味与惣右衛門尉その外牢人組の面々を籠て兵庫頭乃与力となし瀧沢川大林川乃邉に鳴子を引て忍乃者をあらためて最嚴重にかまへさせは長篠の城中の者籠の中の鳥のごとく網に羅れる魚に似て漏出べき透間もなく寄手鯨波の声をあげて責鼓をうつては城中をも屈せず鬨を合せ鐘をならし螺を吹立て龍乃雲に騰て虎の風に向ふ勢をなせり但城中糧乏しくなりしに十餘日をかりの儲ならでいかし如斯てはいかにおもふ共籠城叶ひがたし糧つきなば力よはり氣力うせて敵に向

ふともよき仇に逢めぐるべし雑兵等の手にかゝて犬死せんこと何ほどか口惜かるべきにはやく濱松へ注進し後援を願ひ奉るべきなれとも敵はや四方を取巻たれば使者を出し立ん途もなし誰かある此敵の中を忍ひ通て岡崎まで行着加勢の手段をなし得べきと評定せしに鳥居強右衛門尉すゝみ出某その御使を勤めゆべし首尾よく寄手の陣を通りおほせなば向ふの峠まて合圖のかゞりを上申べし又たし無事に歸り参らんこと甚以て難く候へば今生の御暇乞にて候老母一人の事心がゝりに候へども是は殿の御恵によりて一生は安く過ゆくべしと申けるに

より定昌そのことハ心安かるべし汝が母ハ吾母とおなしく養ふべきなりと約束しけるにより強右衛門尉大によろこび既に立出んとなしける時鈴木金七郎といふ者強右衛門尉が袖をひかへ大事の御使なり御同伴申さん一人敵に取籠られたらんとき一人は走りぬけて御使のむねを出來しすべしと望みける誠に道理なれバ定昌子細なく是を許さる鈴木鳥居大によろこび五月十四日の夜ひそかに城を忍び出西の方なる岩根をつたひ川邉に下て水中をくゞりゆきけるがかねてより武田方すでに其の河底に縄をはり水上に鳴子をかけ置しかバ渡る人あれバ此縄にかゝれバ鳴子のなる様にかまへたりけるを鳥居鈴木いかでか知べき水中より窺ひみれバ怪しき縄を引はへたり様なれバさあらんとおもひつきハ刀を脱て縄を切くゞりてゆきけるに長なかしてと云處まで縄を切とそのまゝ陸まで鳴子の音を武田の番兵あやしみて五六人河邉に集りいかなれバ鳴子の縄の切しぞやと疑ひ思ふ顔色にて川中を白眼て立さまハ一人が曰く今五月の半なりかゝる大川には鱸が上り下るものなりそれぞ縄をバ切しならんと云を水中にて金七郎鱸をと鈴木と聞たゞく大に恐れけるをみて強右衛門尉小声にて金七郎其方にいまだ尾鰭ハなかりしよのゝとたはむ

迄漸く川中をわたりて廣瀬といふ処より上り雁坊峠と云処へかゝり上りて約束の狼煙を上させて十五日の未明に岡崎へちを着しにより岡崎にて聞食城中の様子を委しく尋ね問せ玉へハ強右衛門尉城中に矢玉薬は相應なり多く候へとも兵粮とぼしく今十余日をかぎての糧なれハ兵粮だに沢山候へハ城中いづれも志を一にして仕り堅く守り候故三十日四十日攻候共たやすく落さるべきに候へとも只今兵粮入候こともかなふまじく候早々御出馬候様に願ひ奉る由を言上なしける処へ織田殿の先手瀧川左近将監一益木下藤吉郎秀吉丹羽五郎左衛門尉長秀佐々内藏助前田又左衛門尉福冨平左エ門尉

塙九郎左衛門尉野々村三十郎佐久間右衛門尉信盛金森五郎八青木新七郎加藤市左衛門尉佐藤六左エ門尉以下をいく駆付たりしかバ鳥居鈴木大に悦び如斯神速に御出馬候上ハ武田勢を破らんに何の難き事か候べき但此事未だ城中にハ存じ候まじく何れもとく心痛罷在候それがしハ一刻も早く告知させたく候と申切鈴木金七郎にハ残り止り御案内申べしとて鳥居ハ直に引返しけるにより信長にも加勢の爲に出陣して途中に逗留いたさず早く戦場へ駆向ひ敵を追拂ふべしとて岡崎を立せたまふにより瀧川木下承候とてもそでハ我がとらりしと先陣にすゝめバ牛久保まで五里

餘のあいだ軍勢ならぬ処もなし
流布本武田左馬助信豊或ハ信繁と記す但信豊ハ永禄四年九月信州川中島合戦に戦死す行年廿七歳爰武田左馬助と云ハ信虎の末子信由のことゝ逍遥軒信綱ハ信由の兄之兵庫頭信實ハ信綱の弟なりとし三十一歳
あくまてそれ〴〵の手分して岐阜勢五萬餘騎長篠差て發向せしハ三州勢もおとらじまけじと打立て信長ハ本野原をこゝろざし設樂乃郡の案内者を召出され城介信忠に付て豊川稲荷へ奉幣ありしとかや
豊川稲荷に信忠奉納の上指笄今猶現存せり天正三年五月十六日信忠判とあり

重修眞書太閤記五編巻之一終

重修眞書太閤記五篇巻之二

鳥居強右衛門尉忠死の事
并織田濱松岡崎勢長篠後援乃事

鳥居強右衛門尉ハ織田殿に引分れ片時も早く長篠へ歸入んと途を急ぎせしに長篠の向ふなる篠原と云處まで来て始のごとく川を泳ぎて城中へ入んと爰彼處を伺ひけるに武田家の用心嚴重にして便宜を得ず川邊に鹿垣を結廻し其間に白砂をまき置出入の足跡を守る体なりけれバ強右衛門尉もあきれはてかくまで忍ひ敢て城中に至ることを能ざりけるこそ残

念なきいりまして川をハ渡らんと猶豫なして居たり
ける処を穴山梅雪の郎等小河原弥太郎といふものあ
やしミ何者ぞと尋ねけるに強右衛門尉おもひもよ
らぬ事ゆへ仰天しながらさらぬ体にて是ハ一條右エ門
大夫の小者なりと答へしにより弥太郎いよ〳〵あやし
ミ一条殿の小者の印はあらん脚半の色も不審なりと
おもひ合詞をかけしハ強右衛門尉なか〳〵當惑し
更に返答に及ばねバ弥太郎されバこそ初よりあやし
き者と見つるなりとて大勢折かさなりて搦め取んと
ひしめく強右衛門尉ハ強力無双の兵士今ハかなハじ
とおもひ切太刀をぬいて當をさいはひなぎ廻し薙立

またゝく内に五六人切倒しあハよくバ道を去んと透
間を伺へとも敵兵大勢稲麻竹葦と取巻たれは所詮
切脱ること叶ハじ戰死してハ一大事を告る由なし去ハ
快く生捕れその上に一方便して城中へ通達なさんと思
ひ定め態と手向もせず搦られたり河原弥太郎大に
悦び鳥居を引立穴山の陣へ連行しかバ梅雪入道よろこ
んで召寄拷問させけるに強右衛門ありしも包まず加
勢を頼ミに出たるよしを明白に申けれハ梅雪入道先
武田勝頼乃本陣へ告て後計らふ旨あるべしとて本陣
へ急ぎゆく勝頼鳥居を召出し城中の兵士等何と思ふ
ぞ落城遠からず見ゆるに加勢を請て何かせんとならハ

鳥居荅て左ハ二百余人の勢を以て此城に籠り今日ま
で持たりさへハふて城中乃兵士等が剛勇の志せば御察
あるべうハまつ濱松岡崎より濃州岐阜へ専使を以て
加勢を請ハことも既に承りて相違なきことにハく
とも城中兵粮とぼしきを以て一日もはやく後援の
来着きんことをまちハ由急催促乃ために岡崎まて罷
越しくハ處信長の勢五萬余騎なや岡崎に着陣して
ハ因て城中の体をかたりしかへハ氣早乃大将信長乃先
陣牛久保まて押付てハとゆけるにより勝頼一条右衛
門大夫信龍をまねき鳥居を預け天晴勇士なるくハ
御邊乃陣に伴ふて斯くなしたまへやと喝きしう

ハ信龍心得強右衛門を一条の陣處へ同道しまつ縛乃
縄を解其方ハ勇士なり大將ふかく其方を懇望なし
たふあまり城中に立歸りなハ乱軍のうちに討死を
へしそれよりハ當陣に留れしを幸として武田家に
忠を竭さへし侍を渡物ぞ奥平が充行に恩に十倍
して召仕なるへき由大將乃御下知あるとまかしけ
きは鳥居も心得てかく生捕となる上ハ一命をめてち
るへき筈の處降參なる召仕れんとの御意まてとに
以て辱くぞんしハ弥その御義に相違なく八下郎なり
ら相應の稼仕るへくハとゆけきれ信龍大ふ悦び入ハ
上下の差別なりし心なりを大事とれ心真實に忠を

致さんとおもへバ万事心に従ふ習ひあり其方その
辞に相違なくハ甚りや付ることあるまじぞだに勤
め負ものハなや其方の大功に立しと云その恩賞又
忽に行るべしとありけれバ強右衛門仰の趣か
しこまりて〻身に應し働きやへくゆと答へしかバ
一条いなくその働き左のごとく骨のおれることにあらし
その方を此の城の大手前へ連行べしその時其方城中
乃傍輩を呼出し云べき様ハかくの如き武田の兵士に捕へ
られしかとも使の口状を達せらんことおもふゆゑに
残念なれバ暫時のいとまを請て爰に来れるを我
岡崎に至て加勢のことを言上せしかども岐阜まてハ

石山門徒越前門徒と合戦いとまなく加勢のことお
もひもよらぬことなれバ然れハ城中にも覚悟あるべ
し所詮後援のたのみなしと申べし夫にて其方乃大
功一時に立しといふそのことを諭しければ強右衛門
承りて何より以て安き御事なりと仰のごとく勤め
やへしと答ふるにより信龍も悦喜の体なりその方ハ
果報なるものぞ城中に立かへり今日中に戦死すべきものが
命助かれしのみならず本領十倍の加恩を得ること大將乃
眼力といふべからず世に多からぬ侍なりと称美し然は
約束の如く早く事を行ふべしといそのかせしにより
強右衛門尉大手の前にいたり城中のかたへむかひへき

ちとあらく鳥居が参り候と大音に呼ばゝれは門の上なる矢倉に定昌立あらハれいかに鳥居が敵に捕はまりけるぞと云て大に歎く鳥居打笑ひ大事乃御使に出し身なりそのことを告申さんため敵に暇こふて参り候織田殿自國の軍に暇なく加勢の事思ひも寄らずと申せと敵方の大將たち某におしえて候が實ハ信長五萬餘騎昨日岡崎に着玉ひ某も見参して候先陣ハすでに牛久保に着玉へハ程なく手配りある共後援の到着三日を過申さじそれまで堅固に守らせ玉ふべしと申にぞ武田の兵士大に怒りあへ何といふぞ一条殿の仰られしことを早くも忘れつるか悪き奴の振舞かなとて鳥居を中に引立て一条か陣につれゆき此奴殿の仰られし詞をそのまゝに申さずそのうち實ハかう〳〵と申て候と云ハ一条大に怒り汝いつはりハ某と堅く約束しながら城將九八郎に左れ云ひるぞと詰られハ強右衛門尉大に笑ひまてを河原に見咎られし時切死すると思ひしがまでちがし死てハ大事の使の返辞なしがたし何卒して生捕られそきを見合を城中へ使の用をなさんと思ひしに殿の如斯にて仰ふくめられつれハ實に本意なり安き御事と御請申て初に殿の口上を申終に自身の返辞仕りて候儀とふてハ候なりと申てからくと打笑ふ

武田が兵士これを聞まことに道理なりたとへは我等も傍輩の命なくと待つらん心をやぶり敵に一味なすべきやうなし又敵のもとには従ふて傍輩ともせめなしくなしけるものと忠ありとて誰かはめしつかふべきとて鳥居をよしとそ謂つるといふものも多かりさき一条も何様あさら勇士なり此者一人を殺したり共味方負べき軍に勝へからは赦して城中へ返し入たさとて勝べき味方負もさはゆるしたるやと思ひしか共大将にいたりてはあしかりぬへしとて本陣へいひつき有のまゝに語りけるに馬場山縣なといしくも詰つるものぞや奥平が家には好侍が誰ゝも左こそ有

たゞし年來の主傍輩をすてゝ只今生捕れし人に從ふなる者のあるべきやゆるして返させよ然らは武田の家の眉目となりぬべきにと諫めしかとも勝頼さらに聞入れねは强さもにくし城中の者によく見せて殺させよとて長篠の城の向ひなる有海乃原の篠原にひきゆき磔にかけられたり

左傳魯宣公十五年楚莊王宋を圍ける時宋文公より急を晋乃景公に告しかば晋より解揚と云ものを使として宋に如しめ楚に降ることなかれ晋乃大軍をおこして加勢として至るへしといはせけるに鄭國乃人解揚をいけどり楚人に送りしかは

楚の荘王厚く解揚にをくりものして晋の兵にいはさるゝことなしと云せけるに解揚かしこまりぬと諾てはて樓車に入て宋の軍に向ひ有のまゝにいふをしかれバ荘王怒りて之を殺さんとせしかバ解揚すこしも驚かず君ハ能命を制するを義とし臣よく命を承るを信とす信ハ義を載て行ふを利とす謀て利を失ハず以て社稷を守ハ民の主之義ハ二信なく信に二命なし死して命を成ハ臣の禄なり寡君信臣あり下臣考ことを得たり死また何求めんと申せしかバ楚の荘王舎して去是を帰しけりとかや宣公十五年より天正三年まく二千百六十九年東西千余里を隔て解揚に等しき強右衛門ありて勝頼荘王に似たり楚ハ以て興て勝頼ハ以て衰ふ覧者よく是を思ふべし

城中にてハ信長乃大軍程なく後巻あるべしと聞て勇氣日頃に倍し持場々をいよいよ堅固に守り信長の勢ハ片時も早く押詰んと急ぎしかハ十七日の未の刻設樂郡野田郷にいたり人數を揃へ十八日未明に長篠表へおし寄信長設樂郷極樂寺山に陣を取玉へハ信忠ハ御堂山に岡崎濱松の御勢ハ平井村八劔の宮の前高松山に御陣をめさる

流布本竹廣村彈正山に御本陣を居玉へハ御嫡子岡

崎君ハ松尾山に御陣を取給ひ川上村茶臼山にて
佐久間右衛門尉信盛陣を取とぞ
佐久間右衛門尉信盛木下藤吉郎秀吉丹羽五郎左衛門
尉長秀瀧川左近将監一益佐々内蔵助前田又左衛門尉福
冨平左衛門尉以上五万八千余人十三段に備たり木下
藤吉郎秀吉ハ心中にふかく秘したる計略あれは信
長に言上して先鋒乃備に柵を三重に付たり一方ハ
河路連子の橋より濱田といふ処まて一方は樋の橋
より大宮邊まて付ならべたり濱松岡崎乃御勢は
あまさを見て濃州勢ハ甲州勢をおくれて恐るゝとみ
えたり用心過し所業なりといふものもありけるを

さないひそ濃州勢乃備ざてハきはめて必勝乃理を
考へてありけることなかへし味方も敵をあなとる
ことなく用心をなへしと厳重に御下知ありしとぞ
一書に山縣三郎兵衛昌景ハその見に出て木下か自
身柵を結をゝけある柵を見よ士たてものならじ
あれをひそかに打落せよと我足軽に下知したり
しかしやく其方にてハなるまじと云さゐ昌景鉄
炮を取て立むかひしるいかにや仕たりけん鉄炮乃
玉落けるにより又立め替て立ありしは火縄消
たり因て昌景心に凡人ならずとおそれそのまゝ
鉄炮を投棄しとかや

佐久間右衛門尉信盛偽て裏切を約する事
并酒井左衛門尉忠次奇計言上の事

武田勝頼今年三十歳その身の勇猛抜群なるに任せ人を人とも思はず敵を目に懸ては進むを知て退くを知らず短慮荒涼の大将にて老臣等の諫を用ひず自由の振舞のみ多かりしが馬場美濃守信房山縣三郎兵衛昌景眞田源太左衛門尉高坂彈正内藤修理亮等の如き信玄の代にはながかをあらはし度々の武功世に許されしも大将さのみ賞翫をはせざれは自然と諸士もこれを重しとせは

馬場美濃守信房今年六十二歳山縣三郎兵衛昌景六十七歳眞田源太左衛門尉三十九歳高坂彈正四十九内藤修理亮六十五歳

信長五萬余騎既に牛久保に着きしと聞勝頼甘利新五郎を呼て謀を授け態と勘當をうけし体を以て織田家へ降参をしむ甘利かしこまつて信長の本陣野田へ赴き降参の由を申入るに信長聞召何事も呼入よ然その子細を問べしとて陣中へ入られける甘利少も臆とせず大將勝頼若氣にて老臣等のいふ事を信ぜず一己の勇氣にまかせて諸士を侮る甚いさかひ過ぐくゆへとも讒言の爲に既に鉄鉞の誅を免まじからんとは因て御陣頭へ参上仕る御備の内に在て涯

分の忠を尽しはつやと存ざる由を申信長ハ合戦に先
て敵方の兵を得しを吉兆と云べしとて大に悦びけ
るが木下一人之を悟り敵謀を以て謀れバ我又謀を以て
之に應ぜんとて密に信長に言上なしけれバ信長も
直に會得ありて其翌朝出立の砌佐久間右衛門尉いさ
ゝか遅參ありしを信長大に怒り玉ひ散々に詈て
いふ濱松岡崎の諸士の見る前ともいへ大将分の士
を鞭まで手にまかせて撻あふ信盛聊色をもかへず
遅參なすらぬ由を申開んとなしけれバ信長弥憤り
信長が申言をくへと不當の振舞あるしかじ早と兵士を
返上し其身尾州へ走廻り蟄居すべし　早罷立と追却

られしにより信盛無念極なけれど共詮方なく先後陣
に引返し与力及ひ隊の士を呼集め只今かゝる御掟を蒙
つされバ面々ハ御本陣へ參り誰が手へなりとも御差略に任
すべし其ハ是より尾州へ罷帰るぞと告けれバ与力及隊士
信長の下知を憤りさる無道の主君やある御掟ありとも
我々ハ佐久間殿の手につき外に頭を頼べしとハ思ひよらず
武田の陣へ走入軍半に裏切して大将の肝を消させて腹を
居へしと云より早く佐久間が郎等三左衛門尉と云者多
分の金銀を携て武田の本陣醫王山に登を勝頼の寵臣長
坂釣閑斎跡部大炊助に付て降參をとへき由を申入件の金
銀を送けれバ長坂跡部快く請合勝頼に佐久間降參のこと

を取持けるに無て甘利新五郎より佐久間が信長の氣に
違しを眼前なるしより注進し置つきハ勝頼一義にも
及ひなきを許し合戦乃手くばりを定めその時き
つと裏切して信長乃旗本へ切かゝるべしとまこと
くと申越けることそおろかなけきかの事老臣たちハい
つきも然るへくらん佐久間ほどの者がたやすく降参
すべきもひもよらじと支えしかども長坂跡部さらに聞
入ざまる信長乃本陣にてハ軍評定ありけるに酒井
左衛門尉忠次松山越して間道を經敵陣のうしろ鳶
乃巣山へ取掛りて武田勢不意をうたきて狼狽仕て
ゆへしと言上しけるに信長何とおもひきけん以

の外に氣色を損じやあ左衛門尉傍若無人の十条無
礼とやいはん骨なしとやいはん其方ばかりを弓矢を
ふらべを知たるや推参至極のいひ条や信長が家人なる
らはそのまゝにしてハおかじそのを他家の人なるき
バ腹を居べき地のなきぞやまかりまかり立よ左衛門尉を
いかりきけるぞ忠次おもひの外の織田殿や様らそ
あらめとおもひて評定乃座をまぞ出ぬ

重修真書太閤記五編巻二　終

重修眞書太閤記五編巻之三

秀吉主従勇戰乃事
并鳶巣落城の事

佐久間三左衛門尉勝頼の本陣へ参向し長坂跡部に付て申けるハ信盛させる罪過もなく候に歴々の見られ候所ともいはず勘當を蒙りあまつさへ鞭まてうたれ候を無念骨髄に入て候さきハ信盛直々御陣へ伺公申へく候へとも瀧川丹羽木下なんとの陣無下に近く候間事漏候つく謀あるまじく候因て態と使者をもつて奉て候抑信長の先鋒にて軍を始候ことハあるまじく候間無二

無三に御切破りいへし左もいふて濱松岡崎の勢ゆるく惣くづれに崩れゆくべしと申けるにぞ勝頼大に悦び軍の相圖を定め此方より押掛て戰ふへしと約束なしけるを馬場山縣高坂なんどハ大川を後に當て大敵と合戰よろしからず只今度ハ軍馬をまとめて御歸國然るべしと諫むれども勝頼ちとも用ひず出陣の用意を急がせ翌十九日終に岩代川を打わたり向ひの原へ三十余町押出し清井田原に陣を取鳶の巣の付城に武田兵庫頭信實を大將となし三千余騎その外浪人組名和無理之助飯尾弥四右衛門尉五味與三兵衛尉を加勢として籠置勝頼自身三萬餘騎を引率し竹廣柳田河路下

宮脇深津淺木大海有海原に透間もなく陣を取より信長この体を御覧ありて木下の謀計成就せて敵を偽引出し近々と備を立させよ大川を後になしいきは味方の勝利疑ひなしとて悦び玉ひ軍評定なしたまふとき濱松の老臣酒井左衛門尉忠次末座より進み出明日定めて御合戰あるへし夫に付今宵ひそかに松山越の閑道より敵陣のうしろなる鳶巣山の付城を一時責さ責落し武田勢の陣屋を焼はらひ敵軍後を断まて恐怖しいへし左いハ味方御勝利疑ひなくいとすぐかる処もなく申出しければ信長大に氣色を損じ無礼なり左衛門尉濱松にても岡崎にても何ともいはさ

仰られしを信長も口を開くことなし然るに其方一人武邊だてにはからふとの推參なれ罷て退け左衛門尉と志たゝかに叱りたまふにより濱松にても氣の毒におもはしめされしとも酒井を叱らせたまへハ忠次もかゝることを知食されぬ信長にもあらねど様こそあらめと思ひつれハ言葉なく御前を退出し木下藤吉郎信長のうしろへ廻り酒井がすゝめし処上策にてはに何とて御叱りゆぞと申上しかバ信長人もなげに申されバ餘りに惡くて叱りしぞと仰られたり秀吉承りて容に信長の耳に付て囁やきけれハ信長實もと思召し其夜おそらくに夜に入小性衆を御使

にて濱松へ酒井左衛門尉を具していそぎ御入ゆへと有しかハ濱松にてもいかなる御咎めかあらんさありとて忠次をとゞめたまふべきにもあらねバと恐るゝ信長の陣へ入をたまひけるに信長忠次の手を取たまふて側近く召寄たまひいかに忠次其方が策をまことに以て妙策之さればそしや敵にさとられやせんとおもふゆゑに叱りけるそはや用意して鳶巣へむかふべし信長が目代として金森五郎八佐藤六左衛門青木新七郎加藤市左衛門四人を遣はすべしと仰られけるにより忠次ふかくひ驚きかくなるべきとかねておもひしそのをと心中にならろこひそれより人數を定め松平主殿助伊忠

父子本多豊後守廣孝父子松平左近將監康親菅沼新八郎定盈松平玄蕃允清宗西郷孫九郎家貞以下都合四千五百餘人大雨をおかし嶮岨を志のぎ奥平將監同名藏同嘉八郎を案内者として松山越より吉川村菅沼山祖父山へ忍ひ上りあつまりて志ばし休息し夜のほの〴〵とあくるころほひしもに高き鳶巣の山の頂へよぢ登りけるに木下藤吉郎酒井左衛門尉に向ひ味方二千餘人を引分て長篠の方に備へたる武田勢に向はせ玉ふへし信玄流の諸士なれハこの城にあつまりなから外に押えを置ぬことハよもあらしとかけても是は牢人組の名和無理助をはじめ敵なれし鳶の巣を襲はゞ後らで押かけて駈ちらさんと一段照に備へしを見そめて斯ハ言つるなり酒井らにも不審なる顔色にて左ゆゑ鳶乃巣を責る人數不足なるもやと申けれは秀吉いやく鳶乃巣ハ武田兵庫頭いまだ乳ぞ離れぬ幼子もおなじことなりこれを責落さんこと磐石を以て累卵をおすよりも猶心易しとうち笑ひけるにより忠次も心ならねとも木下かいふにまかせて勢をわけ扱鳶の巣へむかふ時木下忠次にすゝみけるハ是まて信玄と度々御手合乃戰ありけらいつも甲州勢を奥ふかく思召も軍を大事に持たまふを以て彼輩の心にて三州勢を打とけて思ひゐへしいかんや勝頼の若氣なりさ

そ悔ミておそふらめ今度ハ此山上ゟて火をかけて焼立て敵を麓へ追落し手痛く責攻べしと約束し次に加藤虎之助蜂須賀堀尾福島に木下が勢を引分一千余人鳶巣山の麓に埋をきそのち秀吉忠次立あくまをハかくきと下知されハ松平主殿頭父子本多豊後守父子松平左近将監菅沼新八郎西郷孫九郎牧野新次郎松平玄蕃允金森五郎八青木新七郎加藤市左エ門佐藤六左衛門面もふらに切て入城中にてハたく長篠ろうさをろミ打まもり彼處のたゝかひ難儀ならんとき切て出味方を援け城中に引入まてて一息續せんために構し処るまハ爰へ敵の寄んとハかけて

も思ひぬまふして以の外に周章し右往左往とひしめくのを大まを防がんと思ふ者もなく迯道をろゝ求めけるを秀吉忠次目にもかけを掛ゆくべう小屋くへ火をかけしかバ黒烟天をこがしておびたゞし城中ハ武田兵庫頭三枝松勘解由左衛門尉五百余人城戸を開き切て出今日をかぎりの命ぞや一足も引なといさめ諫めらまて突合けまハ寄手たちまち突まけて麓の方へ散々に敗走を兵庫頭これを見て真先に進ミきたまし返さと追掛たり酒井木下の勢ろきと餘りとに敵をおびき出しけるを若くいさめる兵庫頭何とてこれを知べきかれハ跡をバ見すして追

かけるを見てかねて埋伏たる木下勢加藤蜂須賀堀
尾福島時分はよきぞと立あがつてかゝり駈くる甲州
勢をあますなとぞ責付たり牢人組の名和無理助
飯尾弥四右衛門尉五味與惣兵衛尉兵庫頭ハ若氣ことも
思の外の事なれハと引分まて備たりしが鳶の巣の火
乃手を見るよりハ手過りよも手過なるハあらじ信長氣早
の大将なりしが鳶の巣ハ武田方の詰の城に拵しを
知て勢をさし向しなるべしさてハ大事の軍なり其
討死すべき時なりけりと思ひ切て馳向んと打立
は先より待設けし三州勢二千余人あますなと
寄來て鶴乃翼を搏が如く一人もあまさじと責立ま

は無理助も大に驚きかねどに行なさつし信長乃軍
配あまに恐し法性院殿の信長ハ末代の大将なりと時
時仰せられしも断りなりと歎息し味方をいさめ戦
ひけるを秀吉なるが小見て彼ハ名和無理助ごさん
なれと馳よりて如何に無理助と声かくれハ名和も見
合小田原の猿若かとはかりなれやく鎗を合はせしハ
むかし藤吉郎か少年ころ所々を經歴しとき知よし
乃なるし故なるべし木下かふくろなく突かゝる鎗の鋒
のたけしかるに無理助終に突かけ倒るゝを木下か侍か
け寄て首を取五味も飯尾もおなじくて今は誰か爲
に命ををしむへき切死に死や死とて加藤福島にか

け向ひ一所にてみなハ討れけれ大将兵庫頭ハ酒井忠
次が勢とたゝかふて多く敵をハ打なからも痛手薄手
あまた所負て乱軍のうちに討死す三枝松勘解由左
衛門尉一人手もとなく勢猛くたゝかひけるを見て
菅沼新八郎鉄炮の者に下知して手しげく打立させ
けれハあやまたず三枝松胸板をうたれ馬より真倒
に落たりけりさりとも剛勇の士なれハ立上り太刀
を抜て走りかゝらんとする処へ菅沼かけより一太刀打
て打倒し倒るれハ菅沼が郎等駈寄て首を取鳶の巣
にこもりし大将何れも[illegible]をひくに討死しけれハ
兵士等心々に逃ちり一時あまりの合戦に城をハ難なく

く焼落しかち鬨を揚勇ミすゝんて引かへさせめちまし
かへしける次第なり
流布本此条錯乱多し因てことごとく改正を覧者異
むなかれ一本に木下家の陣中に来らしといふ然れ
とも名和無理助を討しハ木下なること明證あれハ
なそらく本書に従ふ松平伊忠の戦死矢中七騎の
戦死その外ことを長けれハ略を

長篠合戦敗北の事
并奥平九八郎抽賞の事

武田勝頼の三萬余騎瀧澤川を打渡て三方になれハ織
田濱松の七万餘騎にかけ合て戦ひを挑まんと一条右衛

門大夫信龍を先鋒の大将として馬場美濃守信房真田源太左衛門尉信綱同兵部丞昌輝土屋右衛門尉昌次乃五手ハ織田方の陣所川上村大宮の前に備を立佐久間右衛門尉明智十兵衛尉木下小市郎か手へ切てかゝるさて又武田道遥軒信連を大将となし内藤修理亮昌豊原隼人佐昌勝安中左近大夫忠成

上野碓氷郡中秋間の城主安中氏ハ鎌倉宗尊親王乃後胤なり左近大夫忠成の父を越前守忠正といふ忠正の父を従三位伊賀守忠清といふ後にハ入道して角源と号す忠清乃父ハ出羽守忠親是れも入道して俊了といふ越後國新發田より長享元年四月上州に移り松井田根小屋に住せと全性寺乃系圖にみえたり

和田左衛門大夫松本兵部丞をはしめとして柳田前に備へし織田勢にかけ向ふ今一手ハ武田左馬助信由を大将となし山縣三郎兵衛尉昌景小幡上總介信貞跡部大炊助勝宜甘利三郎四郎松田三河守小山田右兵衛尉小笠原掃部大夫等ハ濱松乃御先鋒の正樂寺前に扣えたりける大久保七郎右衛門尉忠世同次右衛門忠佐松平周防守か備へ押かゝる信長の本陣ハ始より極樂寺山にして柴田勝家御側に備へたり御堂山ハ信忠信雄乃陣にして信忠をハ丹羽五郎左衛門尉信雄をハ稲葉一鉄去

しを補佐たり先鋒衆佐久間信盛ハ大宮乃前柵乃外三丁許はり出して備を立たり是ハ裏切させんと約束せし処の武田勢を迎えて深く引入んか為なり木下小市郎は竹中半兵衛尉と共に佐久間か右のうく柵の内に備を立しハ明智十兵衛尉ハその左に陣をはり真中にハ瀧川左近将監蒲生忠三郎丹羽勘助氏次柳田前に扣えさてその外江州勢若狭丹後の兵士等をそろひ五畿内乃勢合せて六手別に鉄炮組の衆三千余人を勝て前田又左衛門尉佐々内蔵助塙九郎左衛門尉福富平左衛門尉野々村三十郎等を奉行となし十三段の備立をへて五萬余とそ聞えたり濱松岡崎の御勢ハ竹廣表に備を立ら

し先手ハ大久保兄弟鉄炮乃衆五百餘人を引率し正樂寺の前柵の外へ一町あまり張出したり武田の老臣達この体を見て三州濃州の備立いかにもかろく見えたるそ味方今度ハ勝を取こと難かるへし面々きつと墓所とおもひ定めてよく軍をなしなるびまて信長に笑はるゝなと士卒を勇めせむを見て大久保兄弟言葉を揃へ軍ハ我等か軍なり濃州勢ハ加勢なり我等か手より軍をハ始むへしと云まゝに鉄炮を打掛黒烟をあひかせて馳かゝれハ甲州勢廣瀬郷右衛門尉小菅五郎兵衛尉三科傳右衛門尉かけ合て鎗を合せけるかいつれも痛手負て引退く大久保七郎右衛門渡邉半十郎真先に進て

これを追掛けれハ山縣三郎兵衛尉昌景三千余を引率
して佐久間か手に向ひ大に戦ひ柵の内まて乗入しか
とも鉄炮にあたりて鞍の前輪に俯伏になりて死し
たりけれハこの手の兵士ハ敗走す馬場美濃守はかね
て佐久間か降参心得させとおてをひけれハ信盛と組て
勝負を決せんと獅子の怒りをなして進ミ戦ひける
にかゝり佐久間か兵士多く討れたりされとも濃州勢
ハ柵を小楯に鉄炮をきびしく打かけるにより真田
兄弟も終にこゝにて討れけり土屋右衛門馬場か軍の
えけしきをミて老武者のさぞくたびれつらんなとゝい
昌次請取へしと揉ミにもんて切かゝれハ瀧川佐久間

すきまもあらせす鉄炮をつるへかけて打かけれ
ハ土屋か手の者多く討れ土屋右衛門ハ柵を踏越て戦
ひしか是も鉄炮にあたりて討死す内藤修理亮ハ蒲生
か備を目にかけて突かゝりて息をもつかさす突あひけるか
終に蒲生を突崩し信長の本陣までも崩れかゝらんと
見へし処へ濱松の御手より本多平八郎榊原小平太鳥居
彦右衛門尉か輩真先に進て切かゝり大久保兄弟も力を
合せ火花を散して攻付けるにより勝頼の本陣まて色
めき立て見へけるにそ濱松の御勢いよ〳〵競ひかゝり
もとより甲州勢ハ浮足なるそあてをそめや人々と本多榊
原鳥居平岩ひとまきれもせす馳たりけるにより勝頼今

はなれぬ処なり腹を切んとありけるをとめて内藤修
理亮ありとハ某請取申べしはやく川を渡つて御退候へ
と申にぞ勝頼はしかの勢にハ似も付ぬ必死をのがれ
て退きたり去ハ甲州勢大將を落さんと内藤修理を
をしめ爰まで多く討れたり長坂釣閑跡部大炊助なん
らハいづち遁れたりけん影だにも見えず嗚呼天正三年
五月廿一日いかなる日にてやありけん辰の刻より未の刻ま
でに山縣三郎兵衛昌景馬場美濃守信房原隼人正望月左
近大夫安中左近大夫横田十郎兵衛尉甘利三郎四郎内藤修
理亮真田源太左衛門尉同兵部丞堀無手右衛門大熊備前
守土屋右衛門尉山本小林なんど名ある侍數を尽して討

死し鳶の巣の軍にてハ武田兵庫頭信實名和無理助五
味與惣兵衛尉飯尾弥四右衛門尉三枝勘解由左衛門尉を
はじめ牢人組の者一人も残らず討れたり
長篠の軍ハ別に書ありて其事を詳にせず故に今こゝ
に是を畧したり木下が事にあづかるもの許りを節解
す流布本長篠味方原の軍とハ委しく東國太平記
に書をとりて但東國太平記世に傳ハらず江州大津
の國枝清軒會津合戦以下を鈔撮して刊行せしなる
また長篠味方原の軍をのせず
勝頼もそこに遠く敗走し長篠の圍をとけり奥平九八
郎定昌千死をのがれ一生を得けるを偏に信長加勢の故

ありとて織田殿の本陣に集り首帳の式を執行なされそのち勝鬨を揚られけるにその聲山谷に響きて天柱地軸もたゞ今一時に壊れ落るかとおびたゞし然るに信長上方の事とも心元なし早々凱陣あるべしとて翌廿二日に川坂といふ処へ御陣を移させけるに奥平九八郎定昌参上して御加勢に因て堅固に籠城仕りしこと莫大の御恩にぞとて御礼を述ければ九八郎がわづか五百余人の勢を以て勝頼の二萬五千余を引うけ五月朔日より廿一日まで堅固に籠城せしこと古今無雙の勇士かなと賞美ましまし武者之助と名乗りてと宣ひかつ信長の一字を賜ひ信昌と改めさせ次に酒井左衛門尉をめされ手づから長刀一枝を賜ひて鳶の巣の軍功を賞させ給ひしとなり

一書に信忠長篠の城に入て信昌の武功を賞し給へハ信長より西尾小六光教を使として軍功を感賞ありしといふあるひハ又奥平一族七人家臣五人を御陣頭へめされ籠城の功を賞させ給ひ田嶺吉良田原遠州の内刑部吉比新左山梨高邉等の地を長篠にそへて賜ひ又大般若長光の御刀を賜はるといへり

重修眞書太閤記五編巻之三終